

木野茂さん 38年の講義に幕

写真は朝日 19 日夕刊。「学びのフルコースに花束を」と大きな見出しや写真。写真上は最終講義を終えた木野茂さん=2 日、大阪市住吉区。関心のあるテーマなので抜粋して紹介したい。

もしも自分の所属する組織が公害や薬害に加担していたら、あなたはどうしますかー。

そんな問いかけで学生たちに科学者の責任を訴え続けてきた大阪市立大学の木野茂さん(80)の講義が、38 年間の幕を閉じた。問題の当事者から話を聞き、討論や意見発表で考える力を鍛えた学生は総計 1 万人を超えたという。

もとは宇宙物理学を専攻していた木野さんが、水俣病の問題に関わったことをきっかけに、公害や薬害と科学者の責任を問う自主講座を始めたのは 1983 年。

当時は理学部講師だった。94 年から大学の正規の講義となり、「公害と科学」などの題で担当してきた。公害や薬害だけでなく、地方自治や原発、生命倫理、障害と差別など、テーマは多岐にわたった。それぞれの当事者を教室へ招き、学生と対話させた。

初期のゲスト講師の一人が熊本大学助教授(当時)の故・原田正純さん。水俣病の研究で知られ、現地で出会った患者たちの困窮ぶりを語った(写真右は木野さんと故・原田正純さん=1994 年)。京都市の環境保護団体「グリーン・アクション」代表のアイリーン・美緒子・スミスさん(71)は 94 年から 22 年間、ゲスト講師を務めた。「プルトリウムと私たち」と題し、国が進める核燃料サイクルの問題点を指摘した。

2 日の最終講義。アイリーンさんはリモート参加し、公害や原発問題を念頭に「文明全体を巻き込んだ大きなパラダイムシフトを、皆さんの世代は今後手がけることになる。だからもっと年上の世代に怒ってください」と、画面越しに呼びかけた。

木野さんの講義には原点がある。71 年 3 月、水俣病患者の支援活動に取り組んでいた友人の博士論文が不合格とされた。論文の付記で、科学者がその専門性ゆえに大きな社会的責任をもつことを訴え、それを教授会が問題視したためだった。友人は 135 日間、正門前で抗議の座り込みを続け、翌年、論文は一転合格に。だが、彼は自ら命を絶した。彼が突きつけた「科学者の責任」とは何か、木野さんは考え続けた。

社会にどんな人を送り出すべきなのか。模索を続けてきた木野さんは、最後の講義を次の言葉で締めくくった。「これからも『考えること』を忘れないでください。それも自分の頭で考えることを。ただし焦らずに。すぐ結論を求めようとせず、反芻しながら考えることを楽しんでください」



(2022 年 2 月 23 日)